

鬼師の世界

——白地：シノダ鬼瓦——

高 原 隆

『鬼師の世界』は白地（鬼瓦：窯で焼く前の段階）といわれる鬼瓦を製作する鬼板屋の調査研究に入っている。すでに白地の鬼板屋として地歩を築いているカネコ鬼瓦について考察した。神仲という鬼板屋で修業を積み、親方の神谷仲次郎、筆頭職人の杉浦民一より神仲流の鬼瓦の流儀を受け継ぎ、独立後、深谷定男と協力して、フカヤ産業でプレス機械による鬼瓦製作の開発に取り組んだのが兼子武雄であった。のちにフカヤ産業から独立して、昭和58年（1983）にカネコ鬼瓦を興している。（高原2012）

このカネコ鬼瓦の事例が示しているように、白地の鬼板屋は黒地（鬼瓦：窯で焼いた後の段階）の鬼板屋から派生してきていることがわかる。黒地の鬼板屋に小僧として入り、10年近く修業をしながら働き、やがて独立の気概と確かな技術を持つようになった職人が親方から離れ、新しい鬼板屋を興すのである。その場合、通常は窯を持たない白地の状態の鬼瓦を作る鬼板屋になる。そういった鬼板屋を白地屋と呼んでいる。カネコ鬼瓦に加えて、さらにシノダ鬼瓦を考察することによって、白地の鬼瓦を製作する白地屋の様子がより一層見えてくるはずである。

シノダ鬼瓦へは平成12年と平成24年にそれぞれ集中して調査を行った。その二つの調査を挟んで、時間にしてほぼ12年の歳月が流れている。この間にシノダ鬼瓦では世代交

代という大きな変化を現実にもたらしていた。幸いにして初代の篠田勝久はまだ健在であるが、今は仕事場にはほとんど出ていない。しかし、今回私のためにわざわざ自宅から仕事場にまで駆けつけてくれ、インタビューに応じてもらうことができ、事実前回は聞くことができなかつたさまざまな貴重な話をうかがうことができたのである。

篠田勝久

シノダ鬼瓦を興したのが、初代にあたる篠田勝久である。昭和12年8月29日に生まれている。両親はコンロ屋をやっていた。勝久の家の家計は苦しく、勝久本人の言葉を借りると「貧乏のどん底」にあったという。4人兄弟の3男坊で、小学生の頃にはすでに両親の仕事の手伝いをしていた。「学校もろくに行かんでねー」と自ら語ってる。事実家計は本当にひっ迫していたらしい。

まあ、とにかく生活やってけないもんだい、中学を僕は一、二年生から昼から、あの一、学校、行けれんだっただ。お金がなくてねー。

勝久は中学校一年まで手伝いとしてコンロを作り、中学二年になると、ほとんどまともには学校へは行かず、代わりに鬼長という黒

地の鬼板屋へ昼から仕事に通い始めている。鬼長へ長くいくようになったきっかけが面白い。

あの一、(鬼長へ) かよつとるときにね。浅井長之助さだな一、俺の親方だ。その(鬼長)、あの一、裏に、こう飾ってあるだわな、鍾馗さんだとか、そういう作ったものが……。

そいつを見てからねえ。「あーんなものでかしてえなあ一」と思ってねえ……。

まあ、「これだ一」と思って。土が好きだったもんで一。

勝久が中学二年生の時に鬼長の門をくぐり、小僧として鬼板屋で働き始めたのであった。その当時、小僧も含めて10人ぐらいの職人が鬼長で働いていたという。

昔でいう、うん、あ一、今でいうと小僧だなあ。ほいで一、まあ、自分で言っちゃいかんけど、案外、あの一、あの、自信があったもんだあ。ほいだもんで、(笑) あの一、いいもんやらしてもらったもんだいねえ。

勝久は最初、鬼長へ小僧として働いていたころ、鬼長の家の裏に置いてあった長之助の作った鬼瓦や鍾馗などの作品を見て、なんと胸の高鳴りを覚えたのである。この純粋な感動が、鬼師への道の始まりであった。何か知らない、心に響くものが勝久の胸の奥に存在していた。その後、小僧として仕事を続けていくうちに、勝久はその才能を開花し始め、急速に実力をつけて行ったのである。

結局、腕の競争だもんだ。あの、腕のええ人がええもんやる。やらしてもらえる

もんだ。それで励みになる。だで、そんなん、すぐやめる子もおるしねえ。それに、居残り合戦だな。

それから、まあ、あの一、(腕の悪いものは) 安いやつしかやらしてもらえん。今でもそうだよ。今でもねえ。その、もの(鬼瓦)によって、ものすごい差があるんだな。

腕が悪いと、やらされんもんな。そうだと、努力ってんじゃなく、筋があるよ。たとえ鬼板屋に生まれても、全然いかんひともある。それに、学問とはちょっと違うものがあるからよ。

勝久がいみじくも述べているように、鬼師になるには生き残りをかける厳しい競争にさらされることがわかる。しかもそれは当人の努力だけでは対応しきれない天性の資質がものをいう世界である。勝久が鬼長の裏で見た長之助の作った鬼瓦に過敏に反応したことは、勝久自身にその資質があったことを明示しているといえよう。勝久は自分の人生を振り返り、次のように言っている。鬼長の仕事場に入ってきたのが総勢30人ほどいたが、そのうち、手作りの職人となったのはわずかに一人か二人だという。いかに厳しい世界かがこの話からも見えてくる。

30人ぐらいねえ、俺を入れて鬼長におったけど、手作りで残るのは、一人か二人だったなあ。それで、みんなサラリーマンになつとるよ。

ほとんどの人が当時(昭和20年半ばごろ) 中学1、2年の頃に、鬼板屋に入っていた。現在は高校または大学を卒業してから、鬼師を目指すのが普通になってきている。それと比べると今と昔の違いがよくわかる。

そりゃー、あの、みんな1、2年生からだ。あの、卒業してからやるって人は少なかったなあ。

勝久によると、小僧として鬼板屋に入ると、まず石膏型から鬼瓦を起こし、へらをかけて仕上がるようになることが目標になるという。そして型を作れるようになって一人前になる。通常は、最低4年はかかるという。その後は、他の現物の鬼瓦や、写真などを見て、自分で図面が引けて、図面を見ながら鬼瓦が作れるようになることが目標だという。この段階に達するにはふつう10年はかかると言われる。しかし、早い人は早いらしい。勝久は次のように述べている。

それでも差がすごいあるよ。2、3年で、下手すると先輩よりうまくなっちゃう人もあるし。そりゃー、素質があるよ。

あの一、やらしてみな、わからん。

勝久は鬼長に入り、親方の初代鬼長にあたる浅井長之助のもとで、鬼瓦の修業を始めた。師匠が誰だったのか知りたかったので聞いてみた。

わしゃ、師匠って言って、全然……。まあ、みんなそうだと思うけどね。

自分でやっていくだな。職人に混じりながら……。見ながら、あの、盗み見たり、技を。盗んで覚えようっていうか……。あるところへ、うんじゃ……。そうそう、いちいち、こう、見に来たり……。

ま、ねえ、宮本君（弟子）にもそうやって言うけど、もの、取るように。

物を取るように……。もの見てねえ。で一、ものを見て、自分で勉強するだ。

勝久の場合、あえて師匠といえば、浅井長之助になるわけだが、自ら、ほかの同じ仕事場にいた仲間の職人たちの仕事を見ながら、学んでいったことになる。勝久には何度か同じような質問をして、いろいろな機会に誰から鬼瓦の技術を取得したのか、先生にあたる人はいるのかと聞いたのだが、具体的な名前は親方を含めて一人として挙がらなかった。「見て盗む」がほかの職人から一人で学んでいく方法であった。それが勝久から返ってきた答えであった。勝久は鬼瓦を学んでいった様子を実際に話している。

最初は、そりゃー、石膏型の、2、3年は、「こいつやれ」、「あいつやれ」で、やるだけのことであって……。あとは注文で覚えていくだな。

ほいで、あの一、腕のいい人は、その親方で一人しか、芸人（名人）にはなれんねー。やっぱり。ほいだもんで、競争だわな、職人同士。ほいで、ええ名技だと、ええもんやらしてくれる。と、これ、お金はいい。でしょ。

ほうすると、いい方尽くしになる。金はもうかる。腕は上がってく。ほいで独立できるんだわな。（第1図参照）

この話の中に、なぜ一つの鬼板屋の中にいる職人たちが、自然に淘汰されていき、年月を経て一人か二人の名人が誕生するさまが語られている。こうなると、作ることは職人に任せ、親方は材料の粘土を準備し、出来上がった白地の鬼瓦を焼く窯焚きと、配達、外交に専念することになる。（高原2006）では名人になれなかったほかの職人たちはどうなる



第1図 鬼瓦を製作中の鬼長時代の篠田勝久

のであろうか。勝久は自分の体験から次のようになるという。

おれんところで（鬼長）、一緒に何十人もやったけど、ほとんど機械（プレス機械による鬼瓦製作）に走っちゃとるもんね。プレスにね。

ほんで一、残っとるは関係者（鬼板屋の家族の人）と俺ぐらいだわな。鬼長さんの中ではな。まあ、2、3人おるけど、サラリーマンやら、ほかあと、機械プレスとうになっとるね。

ほいだで金儲けた人は、こう、プレスの人。今はいかんわなあ。資本もいるもんね。

カネコ鬼瓦で見てきたように、昭和30年代末から40年代、50年代にかけて、三州では多くのプレス機械による鬼瓦の生産が盛んになってきた。（高原2012）確かに、戦後、

アメリカの大量生産方式が日本に伝わり、大量生産、大量消費、大量流通の流れが、日本社会に広がっていった。こういった影響を受けて、プレス機械による鬼瓦の生産が急速に増えて行ったのは事実である。ところが、勝久が言うように、鬼板屋の内部の職人たちにあった、職人間の激しい競争もプレス機械生産へ職人が流れる原因になっていたことが見えてくる。手作りの鬼師として生き残れるのはわずかだったのである。勝久はなんと自らの身内を例に職人の世界の厳しさを物語っている。

ほだけどねえ、僕もねえ、弟も、兄も、やったんだよ、鬼板を。ほだけど、俺にはかなわなかったもんで、ほいで一、やめたけんなあ。

うん。やっぱりねえ、悔しくてやめるよ。

兄弟なら協力して助け合って仕事をする、

普通、人道的に考えてしまいがちだが、鬼師の世界は実力がすべてなのであった。

(兄弟でも) 差がつく。全然、向く人と、向かん人が……。

ほやあ、私なんかねえ、ほかのことは全然だめだよ。機械なんか。ただ土持つと、あんねえ、凶面さえあやあ……、何でも、まあできるように……。

ほだけえ、人間の顔てやあ、難しいねえ。ほれし、動物……、な。

ほやねえ、ものすごいですよ。もう、ええ人と悪い人たあ、ものすごい違う。どんなに頑張っても全然ダメ。

逆に勝久が鬼長へ入ったころ、親方の浅井長之助のほかに誰か名人といわれる中心的な職人がいなかったのかと聞いてみた。

まあ、一人おらしたけど、まあ、死んじややした。あの一、大提灯があるところ。あの一、何ていうとこだあ、あの一、碧南の方になあ……、その人が、……。もう上手^{うま}かった。

あやーねえ、「誠一さん」ってってねえ。名前、知らんだけんなあ。忘れちゃった。ほの人、上手かったよ。右と左とねえ、へら、両刀でやれるもんねえ。

このように、勝久がよく覚えている腕のいい職人は「誠一」というひとであった。彼との交わりは語っていない。とにかく「誠一」のような人として生き残るのは大変な競争を勝ち抜いてこなければならぬのは明らかで、勝久もそう言った世界で生き残ってきた職人であった。それを証明していることが一

つある。勝久は旧姓が神谷といい、同じ仕事場(鬼長)で働いていた長之助の妹、浅井ちよ夫婦(篠田平蔵、ちよ)の娘、篠田澄美江と、ちよの兄の長之助(親方)を介して、養子縁組をしてもらい、勝久は神谷勝久から篠田勝久になっている。親方の長之助が勝久の腕の良さを認め、浅井一族の身内としたのである。

まあ、あの頃ねえ、縁故、多かったよ、鬼板……。鬼長さんの、長之助さんの、あの姉妹……の子だなあ。

ここで親方の浅井長之助について述べた。鬼長へは何度も訪問し、いろいろと主だった関係者に会って話を聞いている。しかし実際に会ったのは五代目、六代目の鬼長であり、結果としては当初の目的であった初代鬼長こと浅井長之助を直接知っている人物はいなかった。あくまでも鬼長に伝わる長之助の伝聞であった。(高原2004)これはすでに何度も書いていることであるが、黒地の昔からある、名のある伝統的な鬼板屋は、初代が伝説の人物化しており、直接知っている関係者が極めて少ないのが実情である。勝久の場合、直接、初代鬼長の長之助のもとで鬼瓦の修業をし、さらに長之助の取り持ちで、鬼長の身内にまでなった人物である。それゆえ、初代鬼長、浅井長之助を語るに理想的な人物といえよう。

勝久の物語は戦後から始まる。昭和25年ごろ、勝久は鬼長に小僧として入っている。その頃、鬼長では後継者問題が起きていた。このあたりの事は、上鬼栄という黒地の鬼板屋を調べていた時に、今は亡き、二代目上鬼栄、神谷知佳次本人から直接聞いている。知佳次は浅井長之助の次男である。昭和18年(1943)に召集を受け、戦地へ行っている。昭和20年(1945)に高浜へ帰り、鬼長に入っている。それまでは知佳次は鬼師の修業を

受けていなかった。理由ははっきりしており、知佳次が名前からも見て取れるように、浅井長之助の次男坊だったからである。それゆえ、召集を受ける前は名古屋市役所の職員をしていた。ところが、長之助の長男である道夫もすでに召集を受けて戦地へ行っていた。しかし、長男の道夫は終戦になっても帰国しなかったのである。事実は着任先の外地で、抑留されていたのであった。しかし戦後の動乱のため、道夫の生死ははっきりせず、鬼長では道夫は絶望視されていたのだ。これを受けて、長之助は次男の知佳次を鬼長の二代目とし、そのための修業を始めさせたことになる。知佳次が22歳の時の出来事であった。

そうしたところへ、死んだと思われていた道夫が、無事日本へ帰国して鬼長へ戻ってきたのである。いつ帰国したのかは正確な確認はとれなかったが、このことと関連するかのよう、次男の知佳次が24歳（1947）の時に鬼長から上鬼栄（別の鬼板屋）へ養子に出されている。（高原2004）その間のことを勝久が語っている。

その息子（道夫）は兵隊いって、ほのひとは、本当は、戦死……してたという情報がありましてねえ。ほいで一、弟さん（知佳次）が跡取るつもりだったけどねえ。

ほいで一、ところが生きて帰ってこいたもんだい、ひともめあったわけなんですよ。ほいだもんだいねえ、ほの一、お観音さん作った人のあの一、腕のいい人おらんだったもん。

兵隊から帰ってきた人（道夫）が……、出来ないでしょう。道夫さんが、あの一、あの一、ほの人は一、あの一、死なしたけえ。殺されへんけどねえ。ほいでね

一、親子げんかをようしとってねえ。

このように、道夫は鬼師になる十分な修行を、二代目鬼長になるために受けるタイミングを失ったのであった。運悪く大東亜戦争に巻き込まれて、召集を受け、さらには抑留という長期にわたる外地での生活を余儀なくされてしまったのである。そういったハンディを負いながら、鬼長の二代目となった道夫は長之助の育てた職人と長之助の残した凶面を使いながら、鬼長を守っていったのである。しかし、跡取りの争いがしこりとなり、長之助との関係は修復されることはなかったのである。

話は長之助に戻る。まず勝久による長之助の逸話をここに紹介したい。これによって長之助の人物像がわずかながらも見えてくる。長之助の鬼板師の一端を伝える話がある。

道具、土、持とってねえ、あの、名古屋の東動物園あるでしょう。東山だったかん？あっこで、土持ってって一、みんな、動物はあっこで、作ったの。見て。

つまり、長之助は動物園に行き、直接目当ての動物を見ながら、「粘土で写生」して、鬼瓦のひな型になるものを作ったことになる。この話は鬼長でも似たような逸話として伝わっている。六代目鬼長の浅井頼代が語っている。

まあ、やはり、作るのが好きでね。動物園行って、もう、じーっと、お弁当持って、動物見て、象なら象をね、一つ見て、自分でデッサンして、家に帰って、それを作って、原型を作ったり。だからそういう原型がいまだに家にありますけどね。（高原2004）

長之助の描いたデッサンは旧鬼長の本宅にた

くさんあったが、本宅を現在の建物に新築し、移転した折に処分してしまったと、頼代は述べている。

勝久は長之助の別の話もしている。これも一つの逸話といえよう。長之助の姿がやはり浮き上がってくる話である。

あの一、長之助さんは、ホントに、あの、腕がよかって、観音様でもできる素晴らしい天才だなと思うはなあ。あんな人はおらんよ。

(長之助さんは) 良いところあらへん。よい人はねえ、あの一、よいものはできない。憎ま、憎まれな一。うん、ほんなんねえ、ほやほやしてねえ、おるようじゃあ、もうだめだねえ。

まあ、「今日はわしこれや一」ってって、おそうまでねえ……、えっと一、(夜) 9時までやとたよ。ほいで、「風呂いってきや一」て、窯焚いて。ほいで、焚く。一週間に一回は焚くもんだい。ほいで一、サツマイモも焼いてくれて、「そいつを食ってけや一」っていうて。

また勝久は別の長之助の話に入った。この話はなぜ鬼長が鬼板屋として大きくなって行ったか的一端を物語っている。

あの一、長之助さんが作るんだ、石膏を、型を。僕らは見て……、まだ、そこまで腕は……。何でも作るけんね一、あの一、石膏を。で一、あの一、起こして。

長之助さんは、石膏は最初ですね。石膏型を始めたのが。ほいで、大量生産で……、株とあれで、ほや一、ものすごいよ。

勝久が話しているように、長之助の鬼長は、当時、石膏型をほかの鬼板屋よりもいち早く取り入れて、鬼瓦の大量生産を始めた鬼板屋の一つだった。長之助はそれによって得た利益を、株へ投資していたことになる。現在の鬼長の原型を初代がすでに始めていたことがわかる。

職場はしょっちゅう就いていました。ついて一、ラジオで聴いて、ほいで、(株式を) 注文して一、ほいで一、あの一、(お金を) 背負ってくるぐらいもうけたってねえ。

長之助は鬼板師としての才能だけでなく、株式投資の才能も持ち合わせていたのである。最後になるが、もう一つ逸話を紹介したい。すでに出てきているが、長之助は鬼長へ多大な遺産を残した。ところがもう一つ長之助が郷里高浜に残した遺産がある。高浜市観音寺境内にある高さ8メートルの美しい姿をした観音像がそれである。陶管製で作られており、この素材による観音像としては日本一といわれている。他にも陶管製の大物をいくつか製作しており、この町の美観に大きな貢献をしている。さて、その長之助の作った観音像についての逸話である。

まあ、お観音さんは、まあ、あの一、あれねえ、「山本富士子」っていう映画俳優の人知って見える？

あの人顔……、目的で作らした。

つまり、長之助はなんと、観音様のモデルとして、昔から伝わるいろいろな観音像ではなく、長之助が美しいとみなした現代の女優を観音像のモデルとしたのである。観音像と「山本富士子」を重ね合わせたことになる。勝久は話を続けている。



第2図 衣浦観音像 初代鬼長 浅井長之助作

お顔はね。

お観音さんの姿は昔から（伝統的な）あれが、すでにね、あるけんねえ。（第2図参照）

ここで、勝久本人の話に戻りたい。ただこれまでの話からもうかがえるように、シノダ鬼瓦と鬼長のつながりは普通以上に強いものがある。勝久は13歳の頃、鬼長に入り、鬼瓦の修業に励み、25歳で鬼長から独立している。これからは勝久の鬼瓦に対する様々な思いを見ていきたい。まず、勝久が腕を上げた理由についてである。

腕はよくねえだあ。

欲が深いだけだわ。欲が深いことは、ほうだよ、こすいことして、こすいじゃねえ。なんも、むだなとこ、土積まんでもええじゃないですか。今もほうですよ。重い方が弱いですよ、屋根が。僕のは軽いもんだん、かえっていいことしたなあとと思った。ほいでねー、あの一、10キロ、普通の人で作ると。私だったら6キロくらいでできちゃう。ね、ほいでえ、どえらい額でしょう。

これは鬼長にいた頃、身に付いた勝久の鬼長での生き残りをかけた戦術であった。

ぼくはね、やり方がこすかっただ。結局ね。(笑) あついとこはねえ、何も土うめんでええもんだい。あの一、こうゆうとこ抜いちゃうんだあ、中をね。外さえよきやええだもん。ほういうズルさがあったもんねえ。ほうだもんだいねえ、人の三倍か四倍ももうけました。

あの一、道夫さんとしては、あの一、「シノダの鬼板は軽い」ってって。

軽いわけだわなあ、肝心なとこ抜いちゃうとるもん、土を。

こう大きな雲やなんか、あんた、鬼板、あんた、えらい重いがねー。ほんでは、はぜるでしょう、窯で。ほいで一、親方というものは軽い物を構えてみたいじゃん。私のは軽いじゃん。ほいだと、ますます、あの一、親方、焼く方としては喜ぶじゃん。軽くてきれいで。

ほんだもんだいね、ねたまれましたわ。(周りの職人さんに)

ものすごい。ほいで一、あいつあ一、あんなん、親方に、あんなん、いい子になっちゃってってねえ。

とにかく競争でしたからねえ、ああ一、昭和の、ああ一、一桁周りの頃はねえ。まあ、その、ものすごい激しかったですよ。

勝久は他にも鬼瓦を作るうえで、工夫した話をしてくれた。勝久はいつも効率を考えて、いいなと思ったら新しいことを実行していたのである。勝久の言葉だと、「欲深い」、「こすい」やり方を身につけていったことになる。

うん、ほいで、こう、ひっつけるところでも、塩をちょっと入れてねえ、水に。ほうすると離れないの。丈夫になる。そう言う事をねえ、あの一、工夫したってか……。

ほれはねえ、あの一、ああいう、ああいう時代にねえ、多少塩分が、土と引っ付きがいいってことを聞いたもんだい。こいつを、ほじゃ、鬼瓦に引っ付けて、上に乗せるだけで、普通にスースースー、こうやって引っ付けてつくつとるじゃん。

僕は水をしゅーっと塩水をシューってやって、シューとやって、ちょっと抑えときゃ、ほやーね、あの、欲の深い作り方。

情報はねえ、なくてねえ、やっぱり、あの一、新聞とかなんとかでねえ、そういうことをねえ、あの一、陶芸家とかいってったもんだい。

勝久は「欲の深い作り方」に至るその心について正直に語っている。

要は金もうけしたかっただけ。(第3図、第4図参照)

勝久はそのためにいつもいかに早く、無駄なく作るのかの工夫を勘考してやまなかったのである。それが引いては自分自身の腕を上げるということにつながっていったことになる。勝久は同じような動機を別の言葉でわかりやすく説明している。動機の強さが即、実力の向上に結び付くことがわかる。その話は「なぜ二代目はだめなのか」という説である。事実、勝久も鬼長でそのことを目の当たりに体験している。



第3図 鬼瓦を製作中の篠田勝久1 平成12年1月28日



第4図 鬼瓦を製作中の篠田勝久2 平成12年1月28日

ありゃー、なんでだねー。やっぱり、あのー、芸能界と一緒になあ、野村の子はあかん、長嶋の子はあかんってなものでねえ。そうなっちゃうでないかな。結局、余裕、ゆとりがあっちゃってさー。

めぐまれちゃつとるもんでだわ。じゃ、ねえかな。

そりゃー、俺はいつでもそう思う。貧乏人の強いなあとと思うもんで。恵まれと

るやつあ、案外……。

素質はあると思うわなあ。ほれだけど、あの一、何ていうかねえ、こう、闘志っていうものはやっぱり貧乏のやつは強いな。何となく命がけになっちゃうだなあ。

勝久が自分が生まれた家を「貧乏のどん底」と称し、実際に小学生の頃から家計を助けるために働かされたことがこの言葉とダブってくる。ただ勝久は例外があることを示唆している。

だけどねえ、あの一、もし、親が、これではと、死ぬと、やっぱり、素質、親子の素質は、あの一、あるもんだでね。

この話を聞きながらすぐに思い出したのが、鬼百の二代目、梶川賢一であった。初代鬼百の梶川百太郎は37歳で他界している。残された一家は離散となり、10代の頃、賢一は鬼福窯業に小僧として入っている。そして努力して、いったんは途絶えた鬼百を再興したのである。(高原2003)

鬼瓦の修業の基本は「技術を見て盗む」ことが勝久の話でも語られているが、その逆も存在する。つまり、職人が自分が持っている「技術を隠す」話についても、勝久は語ってくれた。

隠しあいっこするもんだ。

そんだで、あの一、みんな、型でもね、みんな内緒で隠しとくようなもんでね。うん。こういう図面でもねえ。

あの一、昔や何かは隠してね。ほいで一、よく、擦りガラスが……。今は透明

が多いけどね。見られんようにね。隠れてやるんだ。うん。こりゃ、技術の盗みあいっこだもんで。

今は、あの一、すごいオープンになって、みんなして、あの一、若い子だったら、型の貸し借りやらやととるけどね。まあ、おら等の頃はそれどころじゃねえんだ。そんなどころじゃねえなあ。誰が型を貸してくれる。

何でもほうじゃないかなあ。商売ってのはな。まあ、あの一、マル秘ってやつはな。ラーメン屋でもほうじゃん。なかなか味を、あの一、いい味を教えてやるにゃーなあ。息子でもなかなか親の味をすぐには教えてもらえんって。そういう事はあるよ。

勝久は酒と鬼瓦製作についても語っている。これは個人差があり、一概には言えないが、酒の効用については一考に値する。

あの一、俺が昔酒を飲んで、こう、型作ったもんなあ。勢いよく。うん、こう一杯ひっかけてなあ。ほうするとねえ、勢いが湧くんだな。あの、生きたもんができるなって気がするよ。

あの一、「酒が飲みてえなあ」なんて思って、調子の悪い時の作品はだめだと思いうねえ、俺は。

やっぱり、元気のいいねえ……。はつらつたる時の……。作品は違うよ。全然違うよ。

これは俺がよう、あの、覚醒剤で、芸能界の人がさあ……。あれ、わかるなあ。(覚醒剤を) やととって作る、あの、曲

でもねえ、そりゃー、一杯ひっかけたとか、薬打ってやっとなのは、どえらい違うと思うよ。ほいで、あれはのうならんだなあと思って……。芸能界ではな……。

盛り上げるんだわ。そういうところは、あの、必要だと思うんだ。俺は酒でやるけど……。酒だけ。

あのねー、あのー、調子の悪い時には、絶対生きたもんはできんと思うな。

勝久はここに技術を超えた領域について自分の経験から、酒の効用について語っている。自ら作りながら、作品の出来具合の違いや変化を見てきて、初めて語れる事柄であろう。

鬼師になるのも大変であるが、鬼師として生き抜いていくのも大変である。鬼師は独特の持病がある。職業病といってもいい。それと付き合いながら、多くの鬼師は仕事をしている。勝久の話がそのすべてを物語っている。

やっぱり力仕事だ。これでみんな腰痛めちゃうよ。ほんと、俺も腰がくがくだわ。なにせ（鬼瓦が）重いし。これ、中腰でこうやってやるでしょう。こいつ、30年も40年もやると、本当にねえ……。だで、女房でも整形外科へいっとるようなもんでねえ。ほいで、カネコさんだって毎日、あの、病院へ……。

みんないかれちゃう、腰。

俺が42頃から、わしゃ、弱かったけれども、ちょっとやっぱり悪くなってきたけどな。やっぱり50代になるとあかん

な。どうしても腰かけてやるようになる。その代り腕は上がるよ。うん、年数だもんな。

^{やすし}
宮本恭志

シノダ鬼瓦を現在運営しているのは宮本恭志である。勝久は平成23年（2011）に引退している。実質上、親方は勝久から恭志に移っている。今は、勝久の娘、裕子と結婚した恭志夫婦二人が共同して仕事を続けている。

もうどれくらいだな、一年ぐらい前かな、急に「やめるわー」ちゅうって。（笑）ほしたら、もー、パタッと来んようになったもんで。まあ、（週に）2、3回来ちゃね、何か様子見に来るんですけど、まあ、製品作るっちゅうことは、まずないですね。

通常は長男がいれば鬼板屋の跡取りはほぼ自動的に決まるのだが、シノダ鬼瓦の場合、娘婿が継ぐ形になった。しかし、勝久には長男の盛夫がいた。勝久はももとは自分の実の息子に鬼板屋を継いでもらいたかったと思うが、上手くいかなかったのである。

「やってくれんかなー」と思って……。だけど、わしが、あのねー、小さい頃から、あのー、中学入ったら、ああいう「仕事やれ」って言われとって、やでしようがなかったんだわ。

ほいで、俺が、子供の、一人息子、あのー、なるべく「卒業してからやりゃいいや」と思っただわ。だけど、日常生活でやっとなと、あのー、ワンマンで怒って仕事しとるもんだで……。、「こんな親父と一緒にやりたねえわ」ってのが本音じゃねえかなあ。



第5図 鬼瓦をずらす師弟（勝久と恭志）平成12年1月28日

そいで、東京行っちゃって……。

ほいで、あの一、あれ一、もっと俺が上手に小さい頃から荷出しとか何とか……、やらせやあ、やったに言って、娘なんや何かに言われるけどねえ。

勝久が前に言っていた「なぜ二代目はダメなのか」が実際にシノダ鬼瓦にも昔起きていたことになる。それほどまでに技術の継承は難しいことがわかる。しかし、シノダ鬼瓦は宮本恭志に無事受け継がれている。勝久は恭志を実の息子以上に息子と思っているはずである。（第5図参照）

宮本恭志は昭和36年12月29日に大分県で生まれている。18歳の時にトヨタ織機に就職して、愛知県に来た。剣道は三段で、高校の頃にはインターハイの代表として出場していたという実力の持ち主である。剣道部にスカウトという形でトヨタ織機に就職している。小さい時から家のために働いてきており、勝久と境遇がとても似ている。

新聞配達は小学校1年から。そうですね、中学2年くらいまで。もうあまりにも早く始めたせいかな、もう当たり前のことになっていたね、新聞配達が。冬でも夏でもね。雷が鳴っても配達していた。

「苦にはならなかったか」とたずねると、すぐに返事が返ってきた。

全然。未だに雷が鳴るとうれしいね。だけど、結局はその新聞配達のお金は親にまず全部渡して……。そっから親が学校のお金とかは、そっから出したり……。

そういうところでは、おじいさん（勝久）とよく似とったね。うちがやっぱ、そんだけ貧しいというか、まあ、裕福というのではあまりなかったので。

恭志は18歳の時にトヨタ織機に入社したが、同期に入社した中に、勝久の娘、裕子がいたのである。縁があって二人は付き合うよ

うになり、裕子の家^{うち}に行くようになって初めて親の職業を知る。恭志の親は大工だったので、父親の仕事は、時々父について行ったりして、見て育っていた。しかし、勝久のする鬼瓦の仕事は全く知らなかった。結婚したのは22歳の時で、それから恭志は勝久の仕事の手伝いをするようになった。

7、8年くらいやとったかな。こういう型起こし、……、石膏型の……。 (会社の) 残業がない時とかね、休みとか、おじいさんの鬼、3つ4つ作ればアルバイトになるもんで。

つまり、恭志は22歳にしてある意味で小僧となり、鬼師の世界に入ったといえよう。一方、トヨタ織機での仕事は昇格するにつれて、数名の部下がつくようになり、現場の仕事よりも書類を書く仕事が多くなっていった。ところが、恭志は書類仕事が好きでなかった。

いろいろ書類に収めなきゃあかんでねー。もう、結局、建前があまりにも多いもんで、どうも俺には合わんなど。

こういう鬼を作る、こっちの方が……楽しい。やっぱ、出来たときね。完成するとね、それなりの喜びもあったしね。そういう感覚がやっぱ、最初から自分の中に、心にあった。

恭志は結婚すると、3年くらい会社の社宅にいたが、それから家をシノダ鬼瓦のすぐ近くに建てたのである。そして会社に通っていた。ところが会社よりも勝久の仕事場の方がはるかに近いことが恭志の人生を変えることになる。

すぐ近かったし、後は何の気なしに暇だ

ったらほかのことやるよりも土触っとるのが面白かったし、興味があったし、いつでもやれるし。そういうのもあったし、うちでもやれるし、(勝久の) うち行ってもやれるもんねえ。(笑)

気軽だったよ。そういう……とつてもやりやすかったし、ブローカーの人たちも、「やれやれ」って……。やれば自分の足しになるから。自分の事だし、楽なものじゃないけど、まあ、そういう業界の人も応援してくれたし。だんだんサラリーマンから気持がね……。

この業界でやろうかなあと。バックアップもそこそこやってくれそうだし。ここで、おじいさんだけではなく、やっぱ、ほかの業者の人がね……。

こういった流れの中で、恭志は30歳の時に、トヨタ織機をやめている。その頃、事実、シノダ鬼瓦には後継者がいなかったのがあった。これも恭志の心を押しした理由の一つであった。

後継者がおらんという事だし、身近でそういう状態があって……。で、自分で手伝って面白いと。そう思えるなら十分かなと。

恭志は30歳で人生の大転換をする決心に至るまで、4、5年をかけて考えに考えている。会社に勤めながら、同時に、勝久のもとで手伝いながら考えたことになる。

自分も、その、「作り手としてずっと行きたい」って気持ちが27、8くらいかな、だんだん強まってきて……。

会社ってやっぱり定年あるから。あと、

定年の人を見とってね、あの、定年過ぎても、あまり、出会う人も……、会社を定年になったりして無気力状態の人を何度か見たから。それだもんで、やっぱ、こう、定年のない職業で、死ぬまで作り手でおられて、身近でそういうバックアップもある程度あって……。

で、最初はここに工場はなかったんだけど、うちでまあ、居れて。自分の親が出稼ぎが多かったもんで。自分の家でやるっていう……。それがすごい魅力だったんで。で、そういうのが、やっぱ、27、8くらいにほとんど固まったかな。

恭志の場合、安定した職があっただけに、鬼師になる決心をするにはそれなりの年月をかけている。しかし、30歳でひとたびシノダ鬼瓦に入ることに決めると、あとは修業に専念することになった。

おじいさんが最初に始めるけど、あんまり、ああだ、こうだって言わんのね。で、おじいさん（勝久）と、おばあさん（澄美江）に起こしてもらったりとか、やってるのとか見て。やっぱ、おじいさんもさっき言っとったけど、見て覚えたね。そういうなかで、もう自然と自分の中になんかあったね。あまり、こう……ここをどうやったら、ああだったというよりも、自分のやり方の方が、あの、自分も「こういうやり方なんだろうな」っていうふうに思っとったし。

たまにちがつとると、「ここは違うよ」ってたまーに言ってくれて、それ以外はだいたい、あまり口出さなかった。で、焼き見て、「一個ぐらいは失敗してもいい」って。失敗した方がよくわかるからと思って、いいかなと思って。

つぶされたことはね、一回あったかな……。うーん。一回つぶされたことがあるわ。始めて間もないくらい。「こりゃあかん」と。もう、柄があまりにもねえ、一か所ならいいんだけど、何か所もきれいに入ってなかったりした場合、修理……修復しとるよりも、やり直したほうがきれいに上がるし。

自分で壊したことも時々あったという。失敗を何度もやりながら少しずつ上達していくのである。

その頃、自分が型起きして、剥いてみて、「あつ、汚いなあ」って。何回か壊したことがある。自分から壊したことがある。自分から壊した。こう、型起きしてね。こんくらいあるやつを……「こりゃあかんわ」と。ぐしゃぐしゃにして。そしたら、おじいさんに、「何壊しとるだ」と。「いやあ、俺が気に入らなかった」と。「直しゃあ、直る」っていってもね。

あのー、きれいに起こしたかった。自分のなかで、その、こう「いいもの」というのは、やっぱずっとありますよね。結局、何に関しても、まあ、それはあるんじゃないかなと思うんだけど。

そういう技術もないのにね、偉そうにしてるっていう事は出来なかった。今は、多少欠いてても、この直しができるようになったけどね。「いやー、ちょっと失敗しちゃったな。まあ、いいや、あとで直そう」とかね。（笑）（第6図参照）

この時、話を聞いたのは平成12年であった。恭志は自分の技術の位置を次のように言っていた。



第6図 鬼瓦を製作中の宮本恭志 平成12年1月28日

今は38になったけど……、8年間たったけど……、まだ「自分ですべてやれ」っていわれても、ちょっと自信がない。やらされちゃえば、やっちゃうのかもしれないけど……。おじいさんの思っていることを「やれっ」ていってね、……やっぱりね、おじいさんのやっとなとこを見とると、まだそこまではできんと思う。だから、まだ独り立ちは……、そこまで行ってない。そんなレベルにない。

恭志は同じように、生き物に初めて挑戦した時のことを話してくれた。物事の始まりの記憶はやはり深く恭志の心に刻まれていた。粘土を自ら刻みながら、実は自分自身の心に刻み込んでいたのである。

初めて、「ほいじゃあ、やって見るわ」って……。その頃、そんなすぐには、一日じゃできんもんで。で、朝から工場来て、8時から5時のこの時間帯ではとてもじゃないけど……いっぺんでは無理だ

しね。

一回こう……やわらかい土だもんで、ある程度、こう、輪郭を作っても、ついでにほいじゃ、こう……その鼻の形とか、目の形とかにはならんもんで……。こう……、ねばねばしたのは……。ちょっと、こう、土がしまると竹べらで、さつと削れるようになる。

最初は土が引っ付いてきちゃう。だもんで、最初は、まあ、だいたいそういうふうでやっとなで、「どうかな」。他の仕事やりながら、「ああ、ちょっと……」。次の工程になって、「ちょっと触ってみようかな」って。

で、そういう……、で、やっとなで、最初は荷が重くてね。思ったもんが出来なくてね。まあ、ホント、一番最初なんかも、3回ぐらい作りなおしたよ。(笑)

つぶして、ほいでまたね、作って……というの、やっぱ最初の頃よくやりましたね。自分が気に入らないんだよね。おじいさんが、「ああ、似てきたじゃん」って。

そういうふうだね、鬼には鬼の、やっぱこう……勢いとか、そういうのあるし。動物のやつは、動物の、こう……優しさもあるし……。

最近、だから、さっき言ったけど、馬の表情とかね、筋肉の付き方とか、そういうの、実際、ま、近くに馬飼ってるところがあるもので、そこ行って見て来たり、羊の顔を何か前に「作ってくれ」っていわれて、まあ、凶鑑で……。自分の中にも羊っていうイメージはあるけど、羊ってやっぱ、こう……鬼とは逆くらい優しいっていう。その優しさってのは、どうやって表現しようかなって。

時々、だから10時までやることもあるんですが、それは慣れてきて……。5時に終わって、7時くらいからまたはじめて、それから2時間か3時間。一人でやることも。

このように恭志は文字通り職人肌の人で、何かを作り始めると、異常に集中して取り組むのである。特に、注文が来た際の約束の期限や、それに伴って湧いてくるインスピレーションやイメージをしっかりと捉えるために、通常の仕事の時間を超えてもかまわずに一人集中するのである。しかし、その作りは鬼板師流で、いわゆる陶芸作家とは視線が異なっている。

屋根乗ったのを、屋根乗った時を想像するんだ。おじいさんもそうなんだけど、

鬼を上からこうやって覗く^{のぞ}んじゃなくて、下から見る。それをイメージする。で、下から見たときにこう、合うのを。こんなところを見とつてもしょうがない。鬼でも、ちょっと、こう、かがんだような感じで。

見下ろした感じ。そういうのをイメージして。そういう、「見てるぞ」っていう、そういう作り方をするもので。

見上げた感じで考える。まともに正面から見たやつじゃなくて、「見たときに、この葉っぱはどういうふう^{のぞ}に映るかな」って。同じ銀色で、鬼（瓦）は黒くや^{のぞ}てるもので、影の具合を……。彫りをこうやって入れたほうが影が映るで。

あの、……見栄えがいいと……。平らなところは、こういう照りがきれいに出るように。で、深みを出すには……。浅く彫^{のぞ}ってると、深みは出るような……。それをどうやったら……。だから、それを、どういつ影が出るのか……。

あとは、もう、屋根のバランス。だで、全体だね。

恭志は自ら仕事場から外へ出ても、鬼瓦をいかに作ったらいいかさまぎまに工夫を凝らして研究している。

自分で図書館行って、資料とか見ながら。図書館は最初の3年くらいは毎週行ってたよね。高浜のね、図書館にあるもんでね。そこ行って、そこの二階が一応、瓦の資料館みたいになつとるんですけども。

二階にね、まあ、あの、昔の木型だと

か、そういう瓦の一枚一枚の木型とかね。鬼瓦も、そういうものを作って……。古い鬼ももちろん展示してありますけどね。

最初の、ホント、3年くらいはよく通った。子供と一緒にね。(笑) 子供も本借りに行くで。

鬼師は恭志に限らず、地元でいつも研究に研究を重ねている。ただこういった鬼師の地道な調査を通してやはりその土地の伝統が伝えられていくことが見えてくる。また鬼師は地元を超えた鬼瓦の調査も同じようにしている。鬼瓦はその性格からして、土地特有の伝統があると同時に、日本全体においても伝統の広がりを持つからである。

実際にも、天理教って奈良に本部ありますよね。あっこまで足運んだ。おじいさん達と一緒に。一回ね、見に行こうかと、じいさん、見たことなかったもんで。長年やつとっても本部は見たことないなあ。わからん時があるそうなので、一回行ってよかった。で、写真撮ったりなんかして。

やっぱ、行くとね、実際見るのと、こう、立体感が全然違うもんでね。「ああ、そうか、瓦なんか、すっごい、こんなにあるのか」、とかね。

「ああ、こういう作りなんだ」、とか。結局、最初に言ったように、作りをね、実際で見て。写真で見ると正面からしか見れんもんで、大きさ感じなかったんだけど、実際に見るとやっぱ、これだけ高いところで、これだけ大きいなんて、相当……。「これ作るのも、どうやって割ってあるんだろう」って。分割しとるわ

けだでね。パズルと一緒に。

恭志は鬼師なので、一般の人が天理教本部に行ってみるやり方と全く異なることが見えてくる。一般の人は、まず、屋根に視線は行かない。建物全体に視線を奪われてしまう。細部には目は届かない。自分が見に行きながら、受動的に見らされてしまう。一方、鬼師はすぐさま、わき目も振らず、目が屋根に走り、目指す瓦へとたどり着く。視線が能動的に動き、活発である。視線が生きている。しかも、作りの造形美に心を奪われることなく、鬼瓦を作った人の立場になって見る。

「あの角は外すよねー」とか、おじいさんと言った。「あれは右も左も別もんだなあ」。「上だけ外してあるなあ」とか。「足はどこで切っているなあ」とか。大きいやつは、「こりゃあ、5、6個で切っているんじゃないかね」。「そんなにかー」とか言ってね。(笑)「あそこに切れ目あるよー」、「ないよー」とか。

裏側がよくわかるもんで、裏側が、筋が……。あの、柄がないもんで。裏側行って見て。「多分、あっこも切れてる」なんて。

もう、あの、義理の親子っていうより、同業者なんで……。 (笑)

このように、恭志と勝久は義理の親子であって、同業者であり、しかも師弟関係にある。そしてその関係は深い信頼関係で結ばれている。通常の鬼板屋の中の親方と職人の関係をはるかに超えた別次元の関係の中で動いている。

まあ、ホントに、あの、義理のどうの、こうのっていうの抜きで仕事の話しちゃ



第7図 鬼瓦を製作する宮本恭志 平成24年6月15日

う。うちのおじいさんも、よう、同業者の中では頑固者でとおってる。わりと。ははは。(笑)で、「お前、よく一緒にやってるな」と。ハハハ。(笑)「よう一緒に居れるな」と。

もう別に何ともないよ。俺も思ったこと言っちゃうし。おじいさんもそれに対して答えてくれるし。そういうお互いの信頼関係もあって……。

あの、ほかの人にはない物があるんじゃないかな。うちのかみさん(裕子)なんかは、「うちはおじいさんが頑固だから、あんたも頑固や」と。「頑固同士」って、よく言われる。(第7図参照)

恭志は師である勝久を次のように表現している。勝久の仕事に対する姿がよくわかる言葉である。

おじいさんは、やっぱ、職人なんです

よ。根っからの職人。気に入らんとこあったら、売らんと。

それぐらい言っとった。俺が始めた頃、「もう買ってくれんでいい」って。葉っぱが一枚違うくらいで、会社に文句言われたことがあって。「なら、もう買ってくれんでいい」。「お金、もらわん」って。本当、もらってないですよ。ものはないです。(笑)ものは行っちゃってるもんで。お金もらってないけど。その人、多分、売っちゃてるわ。(笑)

恭志は白地屋としてのハンディともいえる焼成の問題についても工夫を凝らしている。鬼瓦は焼き上げて初めて一個の完成した製品になる。ところが白地屋は窯に入れる前の、粘土から形成して乾燥させた状態までの鬼瓦を扱う。それを焼成する作業は別の業者の仕事になる。しかし、この最後の仕上げの工程で、いろいろと問題が出てくる。この問題にいかに対処するかについて恭志は語っている。



第8図 経ノ巻蛇の目吹流し 宮本恭志作

ただ作るだけっていうのは。まあ、本来、おじ、あの一、おじいさん（勝久）から考えると、まあ、「そこまで知らなくてもいいんじゃないか」みたいな。（笑）……いうところがあるんですよ。

それやし、焼けたやつも、そりゃ、よく、焼けたやつか、焼いた人に、あの一、傷の出具合とを聞きに行くんですよ。……んで、実際に出了なやつを、（窯から）出了タイミングで、見に行きますねー。それは、もう、ずーっと始めた頃からやっとなつて、そんで、おじいさんと相談して、「こういうやり方はまずいんじゃないかあ」とか言いあって……。

そんなふうだね、こう、あの一、なんちゅうの、形状が変わればっていう事で。ほら、何ていうの、こらえを、「こらえ」って言うかね。「障子」っていうんだけど。あの一、補強、補強する部分。「あ

一、やっぱ、ここだけじゃ足りんよ」とかね。「もうちょっと、ここも入れようよ」と。

ちよつとずつ、ちよつとずつ。

このように、シノダ鬼瓦では、白地屋としてのハンディーをしのぐために、積極的に、特に恭志が中心となって、焼成後の鬼瓦の仕上がりに見に行き、どうすれば傷が出にくくなるかを研究し、少しずつ補強、補正をしてきている。軽量化、火の通り、穴のあけ方、形状などを、主に鬼瓦の裏側の構造について、勝久と相談しながら決めていっている。（第8図参照）

まあ、そういうのも、焼けたやつを一回見んとね、わからんとこ結構あるんですよ。現場もそうやし、いろんな人のやつ、また、見してもらって、出来たやつを。「ここまでは、いらんだろー」とか

ね。(笑) そういうのはねー、よそ見んとわからん。おじいさん、あんまり人のやつ見たがらんもんで、窯やっとなるところへ、「ちょっと見せて」ってって。

作り手だとなかなかねー、見してくれんところが多いいもんでー。

まとめ

シノダ鬼瓦は初代から二代目への引継ぎが現在から振り返ってみれば比較的順調にいった鬼板屋である。二代目の恭志が型起きができるようになり、さらに手張りという図面から粘土を板状にした鬼板を立体化して図柄を雲や波にして入れて様々な形の鬼瓦を作るようになるまで育て上げたのが初代の勝久であった。しかし、しばらくの間は、最後の仕上げは、特に大きい物になると、勝久がすべて手がけていた。そのうちに勝久があまり得意としない注文を、恭志にまわし、仕上げまで任せられるようになっていったのである。それが、復元とか、鬼面、獅子、シャチといった生き物と言われるものである。このようにして少しずつ、少しずつ、仕上げの段階に至るまで二代目に移って行ったのであった。

ところが、勝久の持病の腰痛がここ3年程から仕事にこたえるようになり、一日の仕事を早く切り上げるように勝久がなっていった。そして、やがて、「まあ、わしも長くはやれんぜ」と言い始め、実質的な仕事のすべての仕上げが恭志に移っていったのである。最後は、勝久が時々、仕事場へ出てきて仕上げ具合を見てくれていたという。

恭志は勝久が常々言い聞かせていたことを話してくれた。それは事実上、勝久から恭志へ仕事が受け継がれたことを意味している。

おじいさんが、もう初めの頃から言っとった、「それは守らないかな」と思ってたのは、やっぱ、これ、鬼瓦作るのに、あの一、「大胆になれ」つつの。

「大胆になり、かつ……」あの一、何ていうの、「繊細に……」。何か、裏表みたいだね。(笑) そう言う事は常々よくいっとった。

シノダ鬼瓦の鬼板の伝統は、勝久の働いていた鬼長の浅井長之助から引き継がれて、勝久が長い年月をかけてその技術を独自に鍛え上げて、シノダ鬼瓦となり、今、二代目の宮本恭志にその伝統が受け継がれたのである。シノダ鬼瓦は鬼瓦の伝統がいかにかに伝えられていくかの具体的な事例を明白に示してくれている。また、いかに手作りの白地屋が職人から生まれてくるかを垣間見せてくれている。

参考文献

- 高原隆 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189
 —— 2003年 「鬼師の世界——黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132
 —— 2004年 「鬼師の世界——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)」『文明21』第12号：113-165
 —— 2006年 「鬼師の世界——黒地：山本鬼瓦系(2)」『文明21』第16号：93-116
 —— 2012年 「鬼師の世界——白地：カネコ鬼瓦——」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第57号：1-21